

女子短大生の母性保健教育に関する一試案

若林敏子・高橋紀美子

はじめに

社会環境の変化に伴って人々の思想や行動の範囲は急速に拡大している。

一方では青少年の肉体的発達も早くなり、思春期の発来が低年齢化していることは周知の通りである。

こうした中で青少年の性に対する知識の不足や未熟さ、誤った考えなどから、異常性行動、若年婦人の妊娠やその結果としての人工妊娠中絶が増加し、母性意識の喪失も叫ばれている。

女性としての母性は、生命を創造し、その生命を健全な「人」として発達させるという重大な使命を持っている。この使命を健全に発達させ、その機能を円滑に遂行できるように、さらに母性として受容していくような、教育が重要であり、かつその教育による影響は大であると考えられる。

近年、性に関する調査や母性意識に関する調査研究が多方面にわたり行なわれ多くの報告がある。

また性教育の必要性はもちろん、近年はその教育内容、方法などについても種々検討されており、勿論、実践の場である学校教育あるいは地域社会においても従来のような性教育にとどまらず、人間教育を主体とした考え方で、男女の役割と生命の尊厳さ、人間愛を基本とした性教育が実施されている。

筆者らは、身体的精神的にも成熟期を迎え社会的にも自律する時期にあり、さらには、母性機能の最も発揮する時期を間近かにし、また結婚への関心度も高い青年期の女子短大生に焦点をあて、性知識に対する理解度を中心に母性意識の調査を行った。さらに、看護科以外の学生に対して行った結婚の医学についての講義のレポートから、女子短大生に対する、母性保健教育の必要性を実感した。母性の生涯教育ともいわれる母性保健教育は、母性の基礎となる思春期はもちろんのことであるが、母性としての意識が高揚し始めた時期に働きかけることが有効的であり、それがさらには母性意識を高める一つの要因でもあると考える。

今回、そうした短大生に対する母性保健教育のあり

方について検討したので、その試案を報告する。

対象と方法

調査対象は〇短大在学中の看護系学生（看護科2年生50名、看護科3年生98名）148名と、看護系以外の学生（食物科1年生95名、同2年生44名、体育科1年生37名、同2年生8名、看護科1年生39名、保育科1年生47名、同2年生25名）295名の計443名である。看護系学生は母性保健受講済である。

調査方法は質問紙法で行い、授業終了後配布し、30分後回収した。回収率100%。

調査期間は昭和59年2月～昭和60年2月である。

結果

1) 背景

通学方法は、全体では自宅通学が206名（58.7%）と多く、次に下宿105名（23.7%）、学生寮72名（16.3%）である。

看護系学生は下宿51.4%、自宅44.6%である。

看護系以外の学生は自宅65.8%、学生寮23.1%である。

同胞数は、全体で同胞2人は286名（64.6%）、同胞3人は99名（22.3%）、一人っ子43名（9.7%）である。同胞4人以上は11名（2.5%）である。

2) 初経年令とその季節

初経発来の年令分布は表1のとおりである。その発来は9才から16才にわたっている。11才から14才の間で91.2%の初経発来がみとめられている。12才と13才に集中して最も多く発来し60.8%であった。

この初経年令の傾向は諸氏¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾の調査結果と類似している。

ただ来潮率は年毎に漸次変化している。昭和50年の調査と本調査を比較すると、図1のようになる。

12才未満での上昇は著明であり、とくに11才は16.6%と来潮率は急上昇している。それに比べ12才以上での変化は小さい。

累積来潮率が50%を超ええるのは、どちらの調査と

表1 初 経 年 令

	9才	10才	11才	12才	13才	14才	15才	16才	
本学学生	人	3	22	88	139	125	44	10	3
	%	0.7	5.1	20.3	32.0	28.8	10.1	2.3	0.7
日本性教育協会	%	0.1	2.2	13.7	38.0	27.0	14.2	4.0	0.3
青少年の性 1974年	%		2.3	13.7	38.2	26.8	14.2	4.0	0.3
行動調査 1981年	%		3.4	18.4	37.0	27.0	11.8	1.9	0.4

も12才であるが、年毎に徐々に60%に近づいている。

累積来潮率が10%以下と90%以上の年令を早発、遅発とすると、本調査では早発者は10才以下となり、全体の5.8%に、遅発者は15才以上となり、全体の3.0%となっている。

平均初経年令は12.26才であり、これは芝木氏⁸⁾の12.5才と比べ早く、僅少ではあるが早発傾向にある。

以上の結果から初経発来の前傾現象がうかがわれる。

3) 初経時の気持

初経時の情緒的な反応をみてみると図2に示したように、全体では「びっくりした」(35.2%)、「いやだった」(33.2%)と否定的な感情を表わした者が多く、「あたりまえだ」「うれしい」など肯定的な感じ方をした者は27.6%と低い。これは萩野氏⁹⁾の調査と同傾向である。

「うれしい」「当然だ」という肯定的受けとめは加

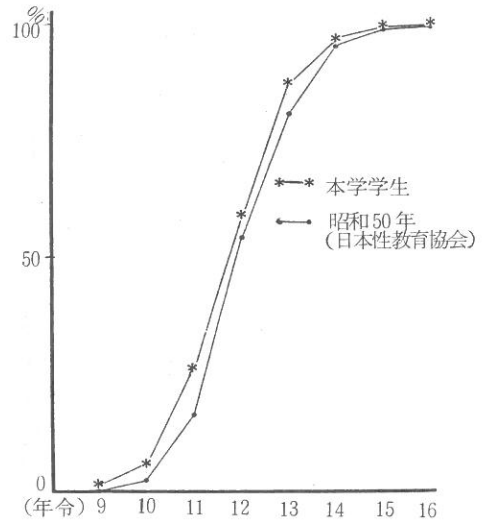


図1 年令別月経累積率

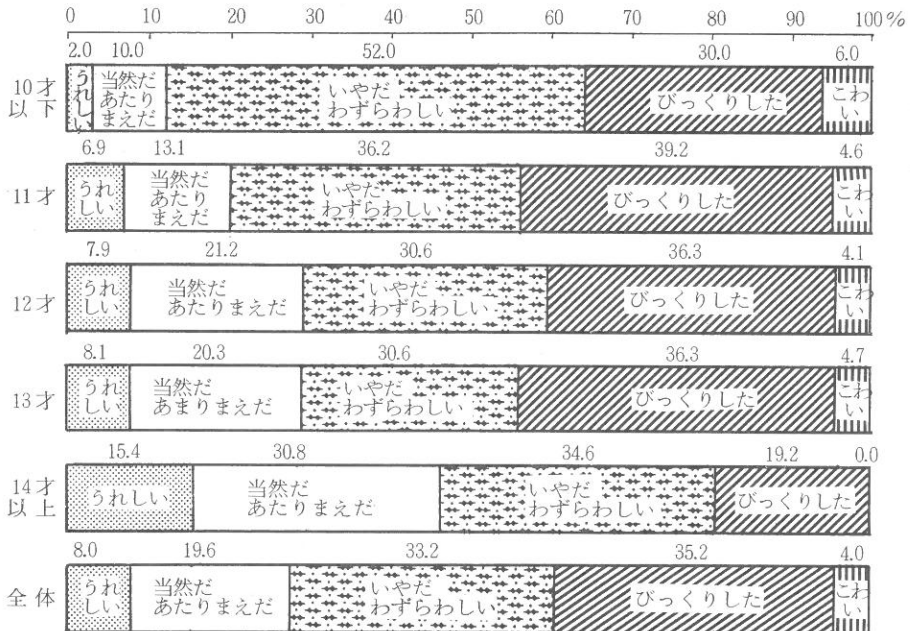


図2 初経時の気持ち

令に伴って強くなっている。一方「びっくりした」「いやだった」「こわい」など否定的な感情は年少者に強くみられる（ $P < 0.05$ ）

4) 初経の説明とその指導者について

初経についての事前指導は99.4%とほとんどの者が受けている。

指導を受けた年齢は11才は201名（45%）と最も多数を占め、10才は138名（31.2%）である。

指導を受けてから初経発来までの期間は、3年間に発来する者が多いが、最長は6年後の者もいる。

指導者は誰かについては図3に示すように、学校の教師が84.4%と圧倒的多数であり、次に母親16.2%であった。この場合の教師とは担任、保健体育の教師、養護教

諭の3者である。そのうち養護教諭から指導を受けた者は63.7%と半数を占め、他の調査結果と同様であった。

希望する指導者は母親48.0%、養護教諭45.0%、女性の専門家9.9%、医師2.5%である。母親と女性の専門家の指導について、現実と希望との比較では、有意差が認められる。（ $P < 0.005$ ）

この質問は複数回答であるが、希望する指導者として養護教諭と母親の2者の回答が目立った。

5) 現在の月経の状態

現在の月経について、持続日数5~7日、周期日数25~35日の範囲の者は307名（69.3%）であり、上記以外の短期、または、長期の者は133名（30.0%）、無回答3名である。

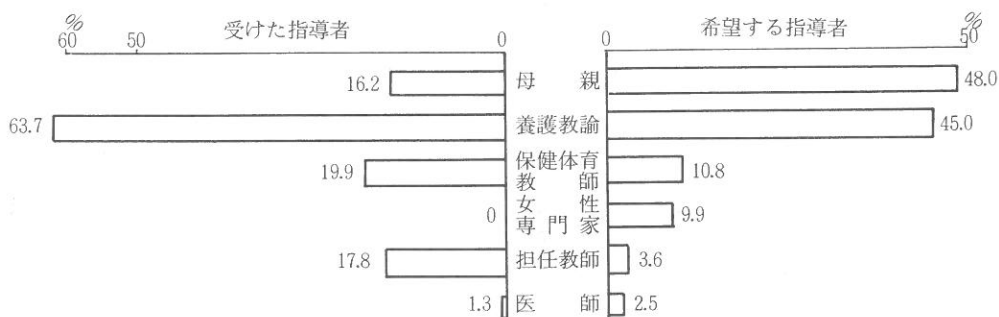


図3 初経について受けた指導者と希望する指導者

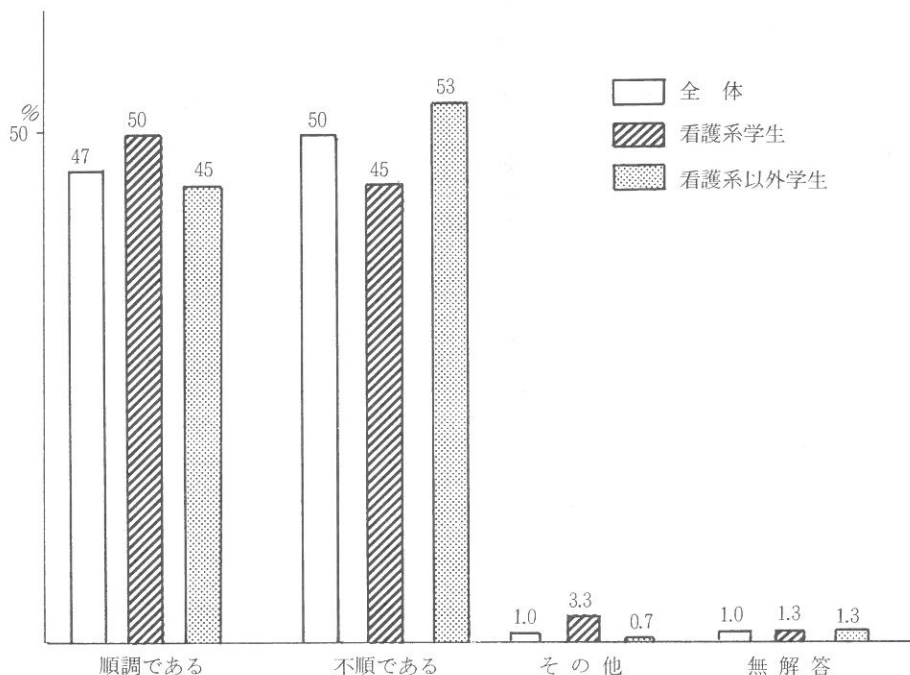


図4 現在の月経の状態

また、順調か不順かについては「順調」と答えた者 209 名、「不順である」者 221 名である。「不順である」と答えた者のうち、上記の持続日数、周期日数の範囲にある者は 117 名である。これは持続日数や周期日数についての理解があいまいであるためであろうと考える。

月経年令 4 年から 12 年のバラツキはあるが、暦年令 19 才から 21 才にも、年数回の無月経の月があったり、月経以来数回しか月経がみられていないものは 7.4 % である。この学生達に対して指導・相談について考慮しなければならない。

6) 月経周期、排卵時期及び基礎体温の理解度

女性の性周期である月経周期、排卵時期についての理解は表 2、3 の通りである。

月経周期の数え方について「月経第一日から次回月経開始前日まで」と答えた者は、看護系学生は 133 名 (90.0 %)、看護系以外の学生は 187 名 (63.0 %) であり看護系学生が有意に高い。(P < 0.005)

表 4 基礎体温で何を知ることができるか。

	排卵日を知る	月経周期を知る	妊娠の診断	受胎調節に利用	避妊	平熱を知る	ホルモンのバランスを知る	わからぬ	計
看護系学生	132人	143人	110人	108人	79人	47人	42人	0人	661人
看護系以外学生	129人	200人	83人	71人	86人	18人	34人	11人	632人
全体	261人	343人	193人	179人	165人	65人	76人	11人	1,293人

基礎体温の意義について、表 4 に示すように「排卵日を知る」と答えた者は看護系学生では 97.2 %、看護系以外の学生は 91.7 % であり、次に「月経周期を知る」と答えたものは看護系学生 89.8 %、看護系以外の学生は 59.2 % である。これらについて正しく理解しているものが両者に多い。しかし「わからない」と答えた者は看護系学生は 0 であり、看護系以外の学生は 5.0 % である。看護系以外の学生に有意差がみとめられる。(P < 0.005)

7) 月経記録、基礎体温測定の有無

月経記録については表 5 のとおりである。「数年来記録している」ものは、看護系学生 48.0 %、看護系以

排卵時期について「次回月経開始前 14 ± 2 日の 5 日間」と答えた者は、看護系学生 97.0 %、看護系以外の学生は 55.0 % であり、看護系学生に正しく理解している者が有意に多い。(P < 0.005)

さらに基礎体温についてみてみると「知らない」と答えた者は 8 人 / 433 人と極く少数ではあるがみられた。「基礎体温」の情報源をみてみると①学校の教師 57.6 %、②マスコミ (TV、雑誌、医学書) 29.6 %、③家族 12.8 % である。

表 2 月経周期についての理解度

	理解していた	理解していない	計
看護系学生	133人(90%)	15人(10%)	148人
看護系以外学生	187人(63%)	108人(37%)	295人
全体	320人(72%)	123人(28%)	443人

表 3 排卵時期についての理解度

	理解していた	理解していない	計
看護系学生	143人(97%)	5人(3%)	148人
看護系以外学生	161人(55%)	134人(45%)	295人
全体	304人(69%)	139人(31%)	443人

表 5 月経記録の有無

	記録している	記録していない	計
看護系学生	71人(48%)	77人(52%)	148人
看護系以外学生	77人(26%)	218人(74%)	295人
全体	148人(33%)	295人(67%)	443人

表 6 基礎体温測定の有無

	測定したことがある	測定したことがない	計
看護系学生	71人(48%)	77人(52%)	148人
看護系以外学生	45人(15%)	250人(85%)	295人
全体	116人(26%)	327人(74%)	443人

外の学生は 26.1 % であり、看護系学生に有意差が認められる。(P < 0.005)

基礎体温測定については表6のとおりである。「測定している」は看護系学生は48.0%、看護系以外の学生は15.0%であり、看護系学生に測定しているものが有意に多かった。(P<0.005)

月経や排卵、基礎体温についての理解度と月経記録と基礎体温測定の実践について、看護系学生と看護系以外の学生の間有意差が認められた。つまり看護系学生はこれらについて正しく理解している者が多く、月経記録と基礎体温測定を実践している者が多いという結果が得られた。

考 察

1) 初経時の気持

初経の発来に対する心理的反応は個人差が大きい。初経をどのように受けとめるか、女性として生まれたことを喜びとして肯定的に受容するか、負担として否定的に受容するかは、それ以後の女性機能を受け入れる心理的態度和関係が深い。母性の受容の第一歩である初経をどのように受容するかは、生涯を決定的にするといっても過言でないだろう。

多くの調査によると、日本では初経を否定的に受容されることが多く、本調査でも同様に否定的受容が高い。

しかし一方には、初経を十分理解している場合は肯定的受容が多く、理解不足の場合は否定的傾向となることや、日米の比較では、初経を進んで受け入れた人は米人では80%、日本人27%であり、初経の説明を受けたとき「自分には来てほしくない」と感じた者は米人22%、日本人77%の報告がある。

つまり初経の受容はその指導によって左右され、またその理解の深度に影響をうけることが考えられる。

現在、初経指導は、学校行事を機会に集団形式で行なわれることが多く、その内容は主として手当の方法である。一方受ける子どもは知的にも心理的にも未熟であり、月経に対する感心も低い。この状況では初経を肯定的に受けとめることは非常に困難であろう。

身体的成長、性的な発育は個人差が大きく、性についての知識も様でない、未熟な時期の初経事前指導は、画一的一方的な内容や方法では、受容の態度に問題が起ってくることは当然であろう。

母性意識の基礎となる初経教育は個々に即した具体的な教育が望まれる。

子どもの状態に適した指導のあり方について検討されることが必要であろう。

2) 初経の指導者について

初経の指導者は学校の教師が84.4%と高く、学校教育ではよく取り入れられている。母親から指導を受けた者は少ない。しかし指導者として母親を望む者が48%と多数を占めている。

広島市内の高校生とその親の調査では、子どもと性に関する対話をほとんどしない親は、父親に60.9%、母親は34.2%であった。また高校生は性に関する相談を友人や先輩にする(60%)か、誰にも相談しない(28.8%)が、求める指導者として教師や親をあげているという結果を得ている。

現実には、親側は性に関する対話に「自信がない」とか、「自然にわかってくるものだ」等とその機会を避ける傾向がみられる。

筆者らは、性に関する指導は、学校における養護教諭等による集団指導をきっかけとして、家庭において、母親と子どもとの対話などによって、個々の子どもに適したフォロー・アップがなされるあり方が最良だと考える。

そのために、親達は子どもと性に関する対話ができるように、話しかけてきた子どもを受容し、人生の先輩として率直に適切に話し合えるようであればならない。とくに母親は、子どもとの間の、もっとも身近で、親密な信頼関係を基盤とし、子どもの成長、成熟過程や身体的精神的変化等を適確に把握して、個別的具体的に指導する役割があると考えられる。

初経の指導者として女性の専門家や医師があがっている。専門職の指導に、知識の豊富さ、個人差への対応の広さなどから、指導内容の正確性と個人の尊重、適切な相談助言を期待していると考えられる。

3) 学習の必要性

筆者(若林)が担当した「結婚の医学」の授業について看護系以外の学生は、①女性のからだについて正しい知識を得た、②基礎体温についての理解が明確になった、③男性の性を正確に理解した、④結婚や女性機能を科学的知識として理解できた、⑤親とも話し合えなくてもやもやしていた部分が明確になった、⑥やっとおとなになった、⑦自分のこととして受けとめられた、⑧結婚前に自分のからだについて知っていることは大切なことだと気がついた、⑨広い意味の結婚について学んだ、⑩自分の生きる姿勢が変化した、⑪短大在学中に受講できてよかった、⑫所属の科では学べない内容だった、⑬このような機会をもっと多く持つてほしいと述べ、また「人工妊娠中絶」について①正しい認識ができた、②中絶の危険性をはっきり理解した、③中絶は母親である自分を傷つけることがわ

かった、④中絶と不妊症の関係が理解できた、⑤中絶による女性の身体の危険性を男性にも知ってもらいたい、⑥避妊の重要性が理解できた、⑦中絶を安易に考えていたが、大変なものだとわかった。⑧生命の大切さを痛感した等学習の機会の要求やその必要性について述べている。

「結婚」「妊娠」「中絶」などは関心の高いテーマであり、学習の機会が在学中に企画されたことへの積極的賛意を示し、知識の確認理解の深まりから、女性として、母性としての自己受容が促がされていることがうかがえる。

本調査で月経周期、排卵時期、基礎体温の理解度や

表7 人工妊娠中絶の過去五年間の推移

	昭和58年	昭和57年	昭和56年	昭和55年	昭和54年
19才以下	5,957人	5,714人	5,280人	4,747人	4,638人

「人口動態統計より」

性行動の活発化の結果からか、10才代の妊娠は年々増加しており、それに関連して10才代の人工妊娠中絶も増加し、社会問題になっている。

性的な面も成熟期にある短大生に対する母性保健教育は、学生のニードからも、社会環境からも重要なことである。

試案

性教育は、人間のライフサイクルを通じての生涯教育ともいわれている。この教育は小、中、高校の学校教育に偏って実践されているが、大学、短大においても必要であることはいうまでもない。

しかし、大学、短大における性教育の報告は僅少であり、武田¹¹⁾は全国の開講率は3.7%と報告している。

開講している大学のうち、教養科目に位置づけているのは一大学のみであり、他は養護教諭や助産婦など将来、性教育指導者としての職務を有する者の養成課程である。

開講していない大学は、性教育の必要性は認めているが、指導者の人材不足やカリキュラムの過密などを問題としている。

筆者らは、短大における性教育の必要性を認める。女子短大生の場合、とくに「母性」を強調した性教育(母性保健教育)が必要だと考える。

本学は看護婦や保母など専門職の養成が目的であるが、この試案は、将来の性教育指導者の養成ではなく、「女性」「近い将来の母性」の育成を目的とする。

月経記録、基礎体温測定など自己の母性機能に対する関心度は学習の量が多い者に有意に高い結果を得ている。

一方、性的な発達の現状を性行動からみると¹⁰⁾、女性の場合について1974年から1981年の7年間には20才の時点で、マスターベーションは30%から41.3%へ、キスは42.9%から62.0%へ、ペッティングは21.4%から41.9%へ、性交は11.2%から28.0%へと著しい変化がみられた。その中性交の相手は年上(98%)、未婚者(93.4%)であり、その動機は、「愛している」47.8%、「好きだ」40.8%、「強要されて」23.7%であった。

母性保健教育は、母性の重大な使命と神秘的な機能を正しく理解させ、母性機能の円滑な遂行を図り、さらに、母性意識の確立によって健全な母性を育成することを目標とする。

具体的には、学生が自分のおかれている位置、状況を自覚し、自分と関係づけて考えられる展望を持たせ、また、必要な場面で、主体的に、かつ科学的判断を的確にし、行動できること、将来の家庭生活の営みと社会創造につながる人間像を示唆し、自己充足の欲求の発達を促し方向づけることをねらいとしたい。

大学、短大生は、受験戦争から解放され、異性に対する関心も高くなり、男女交際は積極的行動に移る傾向がみられる。反面、社会的経験も浅く未熟で、性に対する知識不足や誤まった性知識から様々な問題を惹起している。男女の性心理、性の生理学的メカニズム、男女交際のあり方、同棲や学生結婚の問題などを教え、正しい性行動がとれるような性教育が必要だと考える。

また、成人としての性的適応を学び、将来社会人として必要な性知識の教育も不可欠である。例えば、恋愛、結婚、妊娠、出産、避妊、家族計画等の知識の教育が含まれると考える。

教育内容を整理すると、④大学生として現在必要な性教育は、「人間についての生理解剖」「男女の性差」「社会における母性の役割」「避妊」「人工妊娠中絶の危険性」、⑩将来社会人として必要な性教育は、「望ましい結婚」「生命のはじまり」「生命の誕生」

「家族計画と受胎調節」「家庭と育児」「社会における性（母性）の役割」であり、このような構成が適当だと考える。

性に関する知識は、学校教育において繰り返し学習しているが、筆者らの調査結果からは、それらに対する理解度は稀薄である。これは年令的による知識の理解力や自分自身の性に対する関心が低いことが関係していると考えられる。

短大性を対象として、結婚を中心に、科学的、具体的に構成された教育内容は、学生にとってもっとも身近なことであり、関心度も高く、切実な問題として扱えられる。

例えば、若林は「結婚の医学」（2時間）を次のように展開している。

①結婚の意義 ②結婚するための医学的条件 ③適令期の問題 ④配偶者選定に関する基本的条件 ⑤社会的手続の必要性 ⑥健康診断書の交換の意義などについて考えさせた。

また人間の生理解剖について、医学的側面より講じ、男女のからだの違いについて理解させると同時に、女性の性周期を中心とした月経や基礎体温の意義、測定することの必要性など、具体的かつ科学的に、学生が現実のこととして受容するように展開した。

さらに「結婚の医学」「生命創造」「人工妊娠中絶手術」などの視聴覚教材を駆使して、知的理解とともに視覚的に体験させた。

この授業は学生の反応からも有効であったと自負している。

「女性」「近い将来の母性」の育成を目的とした母性保健教育は、カリキュラムの中に位置づけるならば、一般教育科目の保健体育と重複する部分が多いが、できるならば、九州大学のように、「健康」の科目が設定され、心理面、精神医学面、文化面、法律等の多方面から内容も充実され、人間としての総合的な教育へと発展することを期待する。

現在、本学では、共通専門科目が設けられており、この中で実施しているが、当面はこの科目の中の充実を図りたいと考える。

指導者は、医学的側面についての知識や経験をもつ保健、医療従事者があたるのが適当だと考える。とくに、女性のライフサイクルを通して母性機能にかかわる援助指導を専門とする助産婦が最適だと考える。

授業は集団と個別指導を併用するのは勿論である。その方法は講義のみでなく、視聴覚等を活用した授業の展開により理解を深める。

一方、学生がもっている性に関する悩み、不安、心配ごとなどの問題についての相談事業をとることも必要であろう。特に性に関する問題は多人数での指導でなく、マンツーマン形式の指導が有効であり、そうすることが重要であると考えられる。

そして、学生が在学中に、自己の母性機能に注目し、身体的変化を客観的に確実に把握することから、自己の健康管理が出来るように働きかけたい。

ま と め

女子短大生を対象に性知識に関する理解度を中心とした母性意識の調査を行なった。

(1) 初経発来は、9才から16才の間でみられた。11才から14才に91.2%が発来している。

平均初経年令は12.26才であり、僅少早発傾向にある。

(2) 初経時の情緒的な反応は、否定的感情で受容した者が68.4%と高い。

(3) 初経の指導は学校の教師84.4%や母親16.2%からうけているが、希望する指導者は、母親・養護教諭・女性の専門家である。

(4) 月経周期、排卵時期、基礎体温の意義の理解は、看護系以外の学生より、看護系学生が有意に高い。

(5) 月経記録、基礎体温測定による自己の母性機能に対する関心は、看護系以外の学生より、看護系学生が有意に高い。

(6) 「結婚の医学」の感想から、学生は結婚に関して、また母性に関して、積極的な学習意欲を有している。

(7) 以上のことから、女子短大生を対象とする性教育の必要性が明確になった。母性を強調した母性保健教育を試案した。

お わ り に

母性意識の確立期にある女子短大生に母性保健を教育することにより、学生が自己の母性に対する重要な役割と使命を認識し、生命をいとおしむ心、母性のライフサイクルに即応した健康の大切さに気づき、自らの性を心から受容できるように指導したい。

学習した母性意識が次代の娘へ、その娘が母親となり、更にその娘へと伝承されていく循環性のある母性保健教育が望まれよう。

本調査にご協力頂いたO短大学生諸氏に感謝致します。

引用・参考文献

- 1) 沢田昭；初潮に関する全国調査よりみた発達促進現象，現代性教育研究 1977
- 2) 萩野博；初潮に関する基礎データ，現代性教育研究第27巻 1978
- 3) 鈴木郁子他；女子学生の月経の実態について，保健の科学23(5) 1981
- 4) 中村泉他；初潮年令と初潮発来月，母性衛生24(3, 4) 1982
- 5) 芝木美沙子；月経に関する研究(第1報) 母性衛生24(3, 4) 1982
- 6) 宮原忍；青少年の性行動・性意識，母子保健情報第6号 1983
- 7) 大沢雄二郎他；群馬大学女子学生の月経に関する一調査，母性衛生22(2) 1981
- 8) 1)に同じ
- 9) 2)に同じ
- 10) 6)に同じ
- 11) 武田敏；大学教育による性教育指導者養成，学校保健研究21 1979
朝山新一；性教育 中公新書
玉田太朗；思春期女子の身体発育と初潮，厚生指標30(12) 1983
松本清一；結婚と健康 大修館書店 S 53
河合周子他；母性の生涯教育を考える。母性衛生
本多洋他；母性保健学 南山堂 1976
助産婦雑誌 37(2) 1983, 39(5) 1985

昭和61年3月31日受理